



令和2年度

鹿児島県の教育

12月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会高等学校長部会副部会長

鹿児島県立甲南高等学校長
西橋 瑞穂

学校経営は団体戦

「本校の教育目標は何か？」面談で、職員全員に聞いてみた。答えは、「地球規模でものを考え行動するリーダーの育成」だ。表現としては至ってシンプルで覚えやすい教育目標である。ところが、即座かつ正確に、そして自信をもって言える者は、恥ずかしながら多いとは言えない。(責任は私にあります) 毎日、教育目標を唱えているわけではないから、イメージは持っているものの、即座かつ正確にというわけにはいかないのは理解する。しかし、学校の教育目標を常に意識しているかどうかでは、生徒に同じ話をするにも、ニュアンスが異なる。教育目標達成のために、様々な教育活動を計画しているわけであり、職員一人一人が教育目標をしっかりと頭に入れて、意識して取り組まなければ、目指す生徒を育成できない。

数年前、中学校の進路指導の担当者から聞いたことがある。「公立高校は校長が短期間で替わるから、教育方針も変わる。そういう意味では、ぶれない私立が魅力だ。」公立の場合、校長が短期間で替わるのは確かだ。しかしながら、校長が替わるたびに、その学校の教育目標や教育方針がコロコロ変わるわけではない。どの校長も、自分のカラーを出しつつも、歴代の校長の思いや方針を大切に引き継ぎながら、学校の経営をしているはずだ。ただ、

校長が替わるだけでなく、三年もすると、半分の近い職員が入れ替わることもある。それを考えると、学校の教育目標や教育方針を具体化・明確化した上で、職員全体に浸透させておくことがいかに重要であるかがわかる。

そういう意味で、現在、中央教育審議会で、高校においては、目指すべき学校像をスクール・ミッションとして再定義するとともに、卒業に関する方針(グラデュエーション・ポリシー)、教育課程の編成及び実施に関する方針(カリキュラム・ポリシー)、入学者の受入れに関する方針(アドミッション・ポリシー)の三つのスクール・ポリシーを策定・公表し、校長をはじめとする管理職を中心に、全教職員が連携協力しながら、カリキュラム・マネジメントを実施することの重要性が論じられているわけである。引き続き、教科指導力、進路指導力等、個人技をそれぞれが磨き、切磋琢磨して全体の質を高めることはもちろんだが、今後は、学校が目指すところを一層具体化・明確化し、それを全職員が共有し、改善を加えつつも、意識的に引き継いでいくことに注力することが重要だ。

「経営者」とは、組織の経営について責任を持つ者である。課題山積の今、その「経営者」のみならず、職員全員が経営者マインドを持ち心一つにして教育活動に邁進することが重要である。まさに、学校経営は団体戦である。

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般(財)県校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		

令和2(2020)年 12月号

一般財団法人 鹿児島県校長会館
〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13
振替 02030-1-3192
TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷
鹿児島市東坂元二丁目29-1
TEL 247-1605 FAX 247-2844



当たり前でない私の人生

認定こども園 慈光幼稚園

園長

笠 置 孝 淳

現在、新型コロナウイルスの感染拡大により経済や医療、私たちの生活に多大な影響を及ぼしています。

今年の春に緊急事態宣言を受けて外出自粛や学校機関の臨時休業、在宅での仕事、各イベントの中止や自粛と私たちの生活は一変しました。また、志村けんさんや岡江久美子さんといった著名な方も新型コロナウイルスが原因で亡くなりました。

私の家は寺・幼稚園・保育園を営んでいます。各法要の中止、幼稚園・保育園でも各園行事の中止や縮小と毎年開催していた活動が思うようにできなくなっていました。

更には感染予防対策や感染者がどの地域で発生したのか情報収集を毎日行っていました。

不安な生活を送る中で「こんなことは今まで無かったのに。」や「今の時期はこんな活動をしていたのに。」「いつこの地域にいつ発生するのか、自分が感染するかもしれない。」と自分の中でも苛立ちと焦りが出ていました。

そのような時にふと思いついたのが、仏教の

言葉で「諸行無常」という言葉です。

これは、この世の物事や人生は一定に進まなはいはかないものであり、私の人生はいつどうなるか分からないという意味です。

平安時代末に随筆家として有名な鴨長明は、著作「方丈記」の中で「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみにうかぶ水泡は、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、又かくの如し。」と表しています。

これは、流れる川は絶え間なく流れるが、その水は元の水ではない。よどみの水面に浮かぶ水泡は消えては生じ、その姿で長く留まっているといふためしはない。世の人と住まいもこれと同じであるという意味です。

鴨長明が生きていた頃、源平の戦いや大火、大地震、大飢饉と人災や天災によって多くの命が失われ、人々が日々の生活にも困窮していたことに対して、無常観を表した内容です。

現在、新型コロナウイルスで世界中の人々が日々、戦々恐々としている今日にも時代を超え

て通じるものがあります。

新型コロナウイルスが感染拡大する前は、日々の生活への価値観が変わるといふ状況を想像すらできませんでした。

しかし、諸行無常や方丈記の無常観を考えたとき、私自身が当たり前のように何気なく過ごしてきたのではないか、つまり生きていることが当たり前との気持ちになってしまっていました。

多くの命をいただき、多くの人々の支えによって生かされているのが私であります。更には私が生を受けたことも両親、祖父母だけでなく数えきれない多くの人々の命の繋がりがあったからこそ今があります。

そのことを分かっているながらも日々の生活の中で忘れてしまい、生きていることが当たり前という気持ちになってしまっていたことに気が付かされていきました。

まだ先の見えない新型コロナウイルスの状況ではありますが、そのような時だからこそ、今まで私が過ごしていた毎日を振り返り、改めて自分の人生を見つめ直すことができました。

新型コロナウイルスの早期の終結を願いながら、決して当たり前ではない私の人生を受け止めつつ、私自身も含め子どもたちにも多くの命の繋がりに感謝する心を伝えていき、日々の生活を過ごしていきたいものです。



読書指導が目指すもの

流水小(北) 白川 満

一 はじめに

本校の沿革に、昭和三十四年一月「親子二十分間読書活動」開始と記されている。これは、椋鳩十先生の「母と子の二十分間読書」が活動の発端となっている。

当時の記述を読むと、子供たちはマンガ本であれば月十数冊は読むのに、ほかの読み物はさっぱり読まない。ならばと図書室に児童用の本を増やしてみたけれどさっぱり飛びついてこない。更に校区にある数軒の温泉旅館には、当時としては未だ珍しいテレビがあり、夕方になるとテレビ見たさに子供たちが集まる。

この光景に危機感を感じた当時の校長が「何とかして子供たちを読書に向かわせたい。」という思いから、知り合いだった椋先生に相談したところ、ちよつどの活動の構想を練っていた時であり、試行的に行つたのが発端となったと記されている。ただ活動が定着するまで相当苦勞もあつたようだ。校長が椋先生に宛てた手紙には「教育というやつは、なかなかほねがおれるものです。」と記された一文から校長のため息が聞こえてきそ

うである。

今の時代からすれば、子供たちの姿はどうかのほのとした光景のように思われるが、当時は大きな問題であり課題だった。それから約六十年たった今もこの活動が本校の読書活動の中心になっていると思うと、「読書」の重要さは、普遍的なものである。

二 自ら本に手を伸ばす子供の育成を目指して

本校では、読書指導におけるねらいを「読書指導の充実を図り、意欲的に読む態度を育てる。」「本に親しむ機会を増やし、読書の習慣化を図る。」としている。具体的には、読書量を増やすことと、多くの本と接して読書の楽しさを味わわせることの二点に力を入れている。

読書量については、貸出冊数を毎月カウンとして把握している。町教委も「さつま読書」として学年の実態に応じた本を各学年ごとに五十冊を選定し、各学校の図書室に設置し奨励している。その他、時節に応じた本を紹介するなど子供の興味や関心を引き出す読書環境にも配慮している。また、昨年度は突然の絵本作家の訪問もあり子供たちを驚かせた。

特に、本校において特徴的な活動が、保護者

が主体的に活動する「いもむしの会」の活動である。いもむしの会とは、いもむしがムシャムシャと葉を食べるように本のページを読み進めてほしいという願いから、平成六年に結成された会だ。現在児童数の減少に伴い、全保護者とその会員となっている。主な活動として、毎学期の読書週間には各学級で読み聞かせをしたり、年七回「いもむしの日」と称して担当学年の保護者が全児童に読み聞かせを行つたりしている。中にはお話しコンサートなどユニークな活動もある。

しかし一方で、これらの活動はある意味、子供たちにとっては受動的なものになっているのも否めない。本来の読書指導のねらいは、読書の楽しさを知り「自ら本に手を伸ばす子供」であるはずだ。このように考えると、これらの活動の成果が子供の姿に表れてきたとは、未だ自信をもって言えない。貸し出し冊数も読書指導の成果の一つではあるが、何か物足りなさも感じる。

三 おわりに

読書は、主体性を伴うものであり、させられるものではない。だからと言って読書指導は子供任せではない。主体性を促すには、「読書の楽しさや面白さ」を伝え、気付かせていくことが重要である。

読書のもつ力は大きい。「いつでも手の届く身近なところに本がある。」「一日の中に読書の時間がある。」「これから社会を担う子供たちにとって、このような環境や日常が当たり前になってほしいと思つている。」



「教頭が育つ」学校経営の視点

国分高等学校 山崎 巧

教頭の業務は主に「校長の補佐、校務の整理」であり、この規定は職の内実を的確に表現していると思う。教頭を四年経験し、校長八年目を迎えている。自らが校長の御指導の下、どのように教頭職を務め、今、どんな考え方で教頭を育てたいと思っているかについて、私見を述べたい。

教頭時代、職務の方針は、お仕えした校長の一言で決まった。出張中の校長に課題案件について相談すると、「そのレベルは自分で考えてやってください。教頭さんのできる範囲は広く、学校は教頭が回すんですよ。」と言われた時である。私ははっとして、その職を理解したように思う。それは、校長判断を待つだけではなく、情報が集積する職として、その情報を整理し、まず一定の初期判断をする立場であるということだった。

その後、職員やPTA、同窓会と対話を繰り返して、情報を集め整理し、初期判断するようにした。その判断までを校長に話すようにすると、時にその間違いを修正され、その理由を説明された。その虚を突くような視点は大変勉強になった。運営の根幹に関わる課題でも、選択に迷った時には複数の具体策を作成し判断を仰い

だ。校長判断はいつも一瞬だった。その理由もわかりやすく説明していただいた。

ただ、教頭で対応できる案件は安易に口にしなかった。もちろん必要な報告や連絡は欠かしはしないが、その校長には未熟慮な相談はしてほしくない雰囲気があった。

そんな厳しさを感じた場面は他にもある。ある時、職員会議ですこぶる厄介な案件で行き詰まった時に校長を振り向くと、その目は「自身で始末しなさい」と語られていた。さらに、長期にわたる、ある厳しい保護者対応では、常に「教頭段階で丁寧に対応してください」という御指示だった。最後の最後には校長に対応していただいたが、帰りしな、「教頭さんで収めてもらったらベストでした。」という一言を残された。

厳しさと背中合わせに、大きな優しさも思いやりもある方だった。その校長に仕えた数年間で、運用全般に曲がりなりに一定の判断ができるようになった。むしろそうなるように意図的に教育していただいたように思う。記して感謝するばかりである。

学校運営において、校長は経営責任を負い、最終判断をするのは当然である。しかし、一定

の初期判断は、現場の最前線で情報が集まる教頭がする姿勢を持つことは肝要であろう。「校長を助け、校務を整理する」とは、その意味だと理解している。背後には断崖がある感覚は自然とは持てない。教頭時代にその感覚を少しでも訓練しておかないと、校長はなかなか務まらないと思う。

不肖の自分には、お仕えした校長さんのまねはなかなかできないが、教頭さんとはできるだけ問答するようにしている。この事態についてどう考えるか、どんな対応をしようと思うか。貴方が校長ならどう考えるかという言い方もする。流暢に語る教頭さん、全く語らない教頭さん、いろいろな個性がある。ただ、次のポストを見据えたブレストの意味も込めて聞いている。また、学校経営に参画するとは、共に仲間となり、断崖に立って考えるところだろう。文殊の知恵は、お互いが本気でないと思えてこないと思う。

さて、校長として先頭に立って臨むべきは、学校改革の時だろう。危機管理による学校改革、業務改善に向けての学校改革、新しい教育を導入する学校改革など、その形は多様である。いずれの場合も、現状を分析し俯瞰した上での、活力ある方針提示は不可欠である。しかし、その前に、各職員の考えに十分に耳を傾け、全体のベクトルを一定の方向に導いておかないといけない。その段階で、教頭さんには大いに手腕を発揮してもらおう。多くの教頭さんは常に改善を欲している。そのマネジメント力は必然的に向上すると思う。そういう意味で、必要な改革は躊躇なく進める思いが肝要であると自戒して、今日も校長室の扉を開ける。



地域のよさを生かし、子ども一人一人の豊かな感性を育む学校を目指して

清水小(南) 藤原 聡

一 はじめに

本校は、万之瀬川の上流に位置し、東・北・南の三方を山に囲まれ、周りには田園地帯が広がっている。また本校区は「名水百選」に選ばれた豊かな湧き水、「磨崖仏」に代表される長き歴史があるとともに「地域の宝」として、子どもたちを地域で育て、見守るといふ風土がある。このことは、本校のキャッチフレーズでもある「水・歴史・笑顔あふれる清水小学校」にも反映されている。今年度、明治十一年創設以来百四十二年を迎える本校は、児童数九名、複式三学級の極小規模の学校である。

二 学校経営の方針

学校教育目標を「自ら学び、心豊かで、心身ともにたくましい子どもの育成」とし、子どもが楽しく分かる授業や、友達、先生とのふれあいを感じる中で、子ども自身が「行きたい学校」、子どもの言動や保護者の思いに

さっている。

- (一) 自然を生かした活動として広瀬川での川遊び、カヌーでの川下り体験活動
- (二) 食に関わる活動として農業体験(米づくり、野菜づくり)を農家の方々に指導いただき全児童で行う活動

- (三) 歴史に関わる活動として、校区内史跡を巡るオリエンテーリングや清水の歴史や文化について調べたことを「きよみず新聞」として情報発信する活動

- (四) 高齢者とのふれあい活動としてグラウンドゴルフ交流大会、子ども民生委員活動、老人ホームへの訪問活動

その他にも「地域清水塾」として年六回、土曜日に地域の方が講師となって、木工細工やミニ門松作り、リース作りの体験活動等を実践している。

四 おわりに

今年度は、新型コロナウイルス感染症対策として、例年地域と合同で盛大に開かれる大運動会が学校の単独開催となったり、様々な行事が縮小、延期となったりして、本来の教育活動が十分に行えない状況である。しかし、その対応のみに追われることなく、この状況で何ができるかを校内だけでなく、保護者や地域の方々と知恵を出し合いながら本校の特色を生かした学校経営を進めていきたい。

真剣に向き合う職員の姿勢などから保護者が「通わせたい学校」、子どものよりよい変容にやりがいを感じ、協力・切磋琢磨する職員が「勤めたい学校」、そして、学校のためならと地域が「応援したくなる学校」を目指し、様々な教育活動に取り組んでいる。

また、小規模校の特色を生かし、人権尊重の教育を基調としながら調和のとれた教育課程の編成と実施に努め信頼される学校づくりを目指している。さらに、本校の基本理念を「出会った清水の子どもたちの幸せのために」とし、全職員できめ細かで活力ある教育実践を行っている。

三 地域の特徴を生かした教育活動

地域の方々は、登下校中に子どもたちに気軽に声かけをしてくださったり、学校だより等の感想を学校に寄せてくださったりして学校への関心も高く、子どもたちの健やかな成長を願って様々な体験活動を支援してくだ



働きがいのある職場環境づくりと

子どもの向上的変容

犬追小(市) 花山潤治

一 本校の概要

本校は、鹿児島市の郊外に位置し、校区内には、かごしま健康の森公園、都市農業センターがある。全校児童六十名ほどの、複式学級を有する小規模校である。自然豊かな環境で子どもたちは、日々のびやかに生活している。

また校区内に福祉施設も多く、交流を通して生命を大切にすることを思いやりのある態度を身に付けている。

一方、職員は教育の仕事に喜びを感じ、子どもたちのためなら労を厭わず献身的に取り組んでいる。

二 業務改善で魅力ある職場に

多くの学校で、教師が自然と身に付けていく子どもたちへの寄り添う感覚ゆえに、時間外勤務の増加や多忙感が課題となっている。また、教員採用試験の受験者の減少にみられる教員離れも顕著である。職員の数が少ない本校では、この課題に対して「複数で取り組む」「一人で背負わない」を推進することで教育効果を高め、仕事の効率化に結び付け、ひいては職員の働き甲斐につながると考えながら、取組を進めている。

三 一人にしない、一人にならない

学級担任が生徒指導上の問題や校務を一人抱え込んで孤立しないために、いじめ対策校内委員会等を定期的に短い時間で計画し、情報交換の時間や場を確保している。一方で放課後の会議や週の日程を見直し、教材研究の時間をできるだけ確保するようにした。

定期的な全体で情報共有をする時間と自分の必要に応じて情報収集する時間の確保により、互いの知恵や持ち味を生かしながら、協力し合って課題解決に向かえるようになってきている。

四 多面的な児童理解と担任の時間を確保

本校は複式学級を有するために、高学年を担当する職員の時間的な余裕確保は大きな課題である。そこで、特別支援学級担任や管理職の協力を得ながら、教科によっていろいろな職員がいろいろな学年の子どもたちに直接授業を通して関わるようにしている。

このことにより、学校全体で子ども一人一人を育てることが具体化されてきている。また子どもの側からも多くの先生に指導を得て、多くの先生の下に触れる機会となっている。学校全体が自然にまとまりをもってきている。

五 社会に開かれた学校づくり

保護者・地域とさらに連携を深めるために、学級だより・学校だより等による情報発信、PTA行事や地域行事へ計画段階から参画している。新型コロナウイルスへの対応を進める中で、学校・保護者・地域それぞれの場でのオンラインへの対応が進み、今後は新しい時代の連携が進むと考えている。そして、その様子を子どもたちが見ながら、自分たちもGIGAスクール構想によって、飛躍的に新しい時代を実感し、学びを深めていくと考えている。

六 承認の場としての学校

子どもたちは学校で、教科学習、総合的な学習の時間、豊かな心の育成、体力・健康意識の向上に取り組む。それらのコンテックスが、子どもたちのコンピテンシー(資質・能力)として生きて働くためには、承認が大切になる。承認は賞賛とは異なる。承認は叱ることとも異なる。学校での指導が一人一人の子どもに届くために最も必要なことは「先生は、自分のことを見てくれている。」という子どもの意識である。一人一人の子どもを見て、学校の教育活動をその子どもへのうえに価値付けるときに、賞賛も叱責も子どもの心に成長の糧としてきちんと届く。

そのために授業中に子どもにきちんと向き合うこと、そして、子どもと向き合っていない時間を意識的に確保し、その時間を子どもに役立つものにするのが大切である。そうすることで学校が魅力のある職場になっている。



活気あふれ、

チャレンジする学校を目指して

西伊敷小(市) 石塚 宏 志

一 はじめに

本校は、昭和四十九年に開校し、本年度創立四十六周年を迎えた。現在、児童数三百三十五人、学級数十五学級（特別支援学級三学級）の中規模校である。

保護者や地域住民は、学校教育への関心が非常に高く、学校行事やPTA活動等にとっても熱心で協力的であり、家庭や地域と連携を図りながら教育活動を推進している。

「あいさつと花と読書の学校」をキャッチフレーズに、以下のような特色ある教育活動を行っている。

二 環境教育の推進

本校は、平成十九年度鹿児島市学校版環境ISO認定校として、計画的・継続的に環境教育に取り組んでいる。特に、リサイクル活動におけるアルミ缶回収では、その益金を六年生が総合的な学習の時間の一環として取り組んでいる「アフガニスタンの子どもたちへランドセルを贈る活動」の輸送料に充てている。それとともに、花の苗の購入など、環境教育活動費として



【ランドセルをアフガニスタンへ贈る活動】

も活用している。

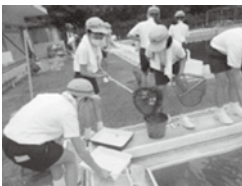
また、ペットボトルキャップ回収では「世界の子どもにワクチンを届けよう！」キャンペーンに参加し、集めたペットボトルキャップをワクチンに換えて、途上国の子どもたちへ届ける活動に役立てている。さらにテープの巻き心回収では、「テープの巻心を集めて緑の地球を守ろう！」キャンペーンに参加している。

「プールの生き物救出&調査」では、プール内の生き物を観察し、プールが生き物たちの住み家になっていることや生態系のしくみなどを学ぶ機会となっている。

また、環境教育の推進を図り、実践の積み上げや学んだことを生かし、発信する力を育成するために、「みどりの小道」環境日記コンテストへ応募し、四年連続文部科学大臣賞を受賞したり、鹿児島県いきいき教育活動表彰で受賞したりするなど、日々の功績が認められ、大きな成果を上げている。

三 朝のボランティア活動

本校の伝統として、毎朝六年生を中心に、通学路の学校坂の清掃ボランティア活動を継



【プールの生き物救出&調査】

続的に行っている。落ち葉などを拾い、学校周辺が整然となって、環境美化による地域貢献活動として、地域の方々からとても喜ばれている。

児童会を中心とした朝のあいさつ運動では、「語先後礼」を掲げ、全校体制で取り組んでいる。あいさつが響き合うさわやかな朝の光景の一つとなっている。

四 体験活動の充実

体験活動で得た感動は、生きる力の源になると考え、本校では体験活動を積極的に取り入れている。

集団宿泊学習は、三島村の「冒険ランドいおう島」（五年生・二泊三日）で実施している。雄大な自然に恵まれた環境の中で、ジャンプ体験や海中温泉、クルージングなど普段の生活では体験できない貴重な時間を仲間と過ごし、忘れられない思い出となっている。

また、火山防災推進事業による桜島の現地視察やお茶・桜島小みかんの出前授業、豆腐作りなど、様々な体験活動を通して、大きく成長している。

五 おわりに

子どもたちが、「学校に行くのが楽しみ。」と毎日元氣よく登校し、「今日も一日楽しかった。」と満足して下校することが何より大切である。今後子どもたちの元氣な声が響き渡る、活気あふれ、チャレンジする学校を目指して日々取り組んでいきたい。



【清掃ボランティア活動】



目指す生徒像の具現化を図って

住用中(大) 小田 敬介

一 はじめに

本校は、奄美大島のほぼ中心に位置しており、校区内には日本で二番目に大きいマンダローブを有する、自然豊かな学校である。現在、全生徒数は十二名の極小規模校であるが、運動会や学習発表会を小学校と合同で実施するなど、小学校と連携を図りながら、充実した教育活動に取り組んでいる。

二 目指す生徒像の具現化について

本校の目指す生徒像は、校訓になぞらえている。「好学・自律・根性・協同」が、本校の校訓である。それぞれに具体的に、どのような生徒であってほしいかを明記し、校内の掲示や部活動で唱和するなど、常に意識できるように環境を整えている。現在、具体的に取り組んでいる内容と課題について、紹介したい。

(一) 好学

好学については、「めあてを持ち、進んで学ぶ生徒」と示している。まず、授業を充実させるために、奄美市の授業改善五つの方策を、徹底することを心がけている。他にも、家庭学習九十分の確実な実施。学習内容の確実な定着を図るための放課後個別指導の充実。このような取組を通して、

将来の進路選択の幅を広げ、なりたい自分になれるような手立てをとっている。

(二) 自律

自律については、「自ら判断し、行動できる生徒」と示している。現在、本校の生徒で、生徒指導上で問題を抱える生徒はいない状況である。そのような状況に甘んじることなく、時と場に応じた行動ができるように、指導を続ける必要性を感じている。また、自律した生徒を育てるには、生徒会活動の充実も大切である。専門部活動で様々な企画を立て、運営する経験を通して、判断力や行動力の育成に努めている。

(三) 根性

根性については、「前向きに、何事にも努力する生徒」と示している。夢や目標を定めたとき、それを実現できるかどうかは、「最後まで諦めずにやり通すことや、覚悟を決めて物事に取り組む姿勢」が大切である。本校の教育目標の中に「夢を実現できる生徒を育てる」と掲げており、「根性」は校訓の中でも一番重要であると考えている。運動会や部活動で、チームや組のために、自分の限界を超えて力を発揮しなければならぬことがある。根性を身に付ける

ためには、貴重な時間ではないかと考えている。また、学習面においては、定期テストのたびに目指す目標を定め、努力し、必ず達成しようとする、学習への前向きな姿勢づくりに取り組んでいる。

(四) 協同

協同については、「人の心が分かり、思いやりのある生徒」と示している。本校のような極小規模校では、ある意味、生徒も職員も手を抜くことが許されない。それは、一人でも手を抜いてしまうと、それを補うためには、非常に大きな労力を要してしまうからである。それを自然に理解しているのか、学校行事では、全ての生徒が自分の役割をしっかりと果たしてくれる姿をよく見ることができると。また、小中合同で実施するので、本校の生徒が小学生をリードする様子も見ることができると。生徒会活動で、朝の清掃に取り組んでいるが、毎朝ほぼ全員が参加して校内の美化活動に取り組んでいる。今後この姿を、伝統として残していきたいと考える。

三 おわりに

何かを始めるときに、環境が整っていないことを理由に、あきらめてしまうことが多い。極小規模校では「人数が多ければできるのに」と、感じることもある。しかし、本校の生徒はそれを理由にしない。今いる仲間で、できることをやっていこうという意欲を感じる。その生徒たちの頑張りを認め、さらに伸ばせるように、目指す生徒像の具現化を図ってきたい。



どちらに転んでも「しめた」と思え

小野小(始) 今村 靖

新任校長一年目。毎日起きる様々な出来事に「学校は生きている。」ことを実感する。加えてコロナ禍の中の学校経営では、正解のない課題に向き合うことも多い。

四月の校長室。前任の校長先生が置いていかれた日めくりカレンダーに目が留まった。「大人になって振り返る『先生からもらった忘れないひとこと』を集めたカレンダーだった。めくる度に、何気ない言葉の中にも含蓄のある言葉がキラリと光っていた。その中で特に印象に残ったのが「どちらに転んでも『しめた。』と思え。」である。

元々は、科学者の板倉聖宣さんの言葉だそう。人生の未来はそうそう予見できるものではないが、私たちはややもすると「この場合はこ

うなったほうがいいに決まっている。」などと思いがちである。しかしそのようにいかなことも現実であり。その時に色々な条件を考えてみると大抵の場合「どちらに転んでもしめた。」と思えることがあるということらしい。科学者として実験結果と向き合う中で生まれた言葉のようにも推察されるが、人生においても当てはまる言葉である。

どちらに転んでも「しめた。」と考えられるようになると、気持ちが大きくなり、現実が自分の予想しなかった方向に進んでも、その新しい状況に感じて、有利な点を見いだしてたくましく生きることができる気がする。経験が浅く、失敗ばかりの新任校長の負け惜しみだが、「どちらに転んでもしめた。」という考え方は決して慰めではなく、人生を前向きに見て行く知恵だと思う。これからもピンチをチャンスに精進していきたい。



「全体感覚」

櫛小(隅) 加峯 美由紀

ちょうど初任者研修が開始された年、私は、鹿児島県の教員として採用された。

赴任した学校は、一学年一クラスで、児童数減に伴い、学級数も毎年一クラスずつ減少、新採四年目には複式学級の担任だった。

新採一年目は、校務分掌が少なく、周りの先生や指導教員に助けられ無事過ぎた。

二年目は、二年生を任された。しかし、学級数減・職員数減で、校務分掌も増えた。当時の私はきつと「無我夢中」「なり振り構わず」という言葉が当てはまったのであろう。見かねたU校長が、ある時、『全体感覚』という言葉を見せてくださった。U校長は、「この言葉は『造語』かもしれないが、物事を成し遂げるには、一点だけを真っ直ぐ見て計画をするのではなく、広く様々な角度から物事を見つめ、考えて、計画を立てていかなければならない。そういう意味で皆さんには『全体感覚』を身に付けてほしい。」ということを言われた。

当時、提案書を持っていくたび、教頭先生に質問をされていた私だが、この言葉を教えてもらい、物事の計画の立て方を変えた。

物事を成し遂げるには、成功体験をイメージし、そこから逆算し、何(人・経費・時間等)

が必要なのか、そのために何をすべきか、5W2Hを考えているかなど、多角的に物事を考え、計画を立てた。もちろん最初からできたわけではない。しかし、繰り返し繰り返し『全体感覚』で物事を考えることで、想像力、そして創造力も養われていった。初任校でこの言葉に出会えて本当に良かった。

そしてこの言葉は、今、校長として学校経営を進める上でも、とても役に立っている。改めて、U校長の凄さを感じる。きつとU校長も『全体感覚』をもち、学校経営をされていたのであろう。U校長に仕えた二年間があるからこそ今の自分がいるのだと思う。

未来ある先生方に、私もこの言葉を伝え、今後も学校経営を続けていきたい。

先人に学ぶ 『苦しい時に思い出す、二ノ方良右衛門のこと』

串木野中(日) 中村 憲

黎明館に勤務していた時のことである。その日は秋に開催される特別展のために、展示資料を川内歴史資料館へ借用に伺った。担当者が多忙のため、代わりに見たことがない資料を借用せねばならず、気が重かった。資料は幕末長崎

海軍伝習所に薩摩藩から参加した、二ノ方良右衛門の資料であった。

長崎海軍伝習所は、安政二年に江戸幕府が海軍士官養成のため長崎に設立した教育機関である。ペリー来航によって西洋軍艦を目の当たりにした幕府は海軍創設の必要性を痛感し、オランダから軍艦を購入して、その乗組員養成のために伝習所を開設した。研修生は幕臣や雄藩藩士から選抜し、オランダ軍人を講師として、航海術、医学、造船学、機関学などを学んだ。薩摩藩からは十六名の研修生が参加し、その中の一人が二ノ方良右衛門である。

資料は手書きの和綴じ本で、正確な図面や表、造船方法、航海術が記され、二十冊を超えるものであった。資料を見て驚いた。ページをめくると、熱意と気迫と真剣さが伝わってくる。本文の余白には講義メモがとぎれること無く書き込まれ、貪欲に学習に打ち込む姿が鮮やかに浮かんだ。わずか一年という期間にこれだけのものを残せるのか。同じく薩摩から参加した藩士たちも、そして、日本中から集まった研修生たちも、同じように学習したに違いない。なんという濃密な時間とエネルギーだろうか。

点検の冊数を経るごとに、驚きは感激に、そして自戒の念へと変わった。この人は、この人たちは「けしんかぎい」仕事をしている。気乗りせず資料と向き合った自分が恥ずかしかった。幕末、薩摩藩は集成館事業を成功させ、国内における様々な科学技術をリードし、明治維新に

つながる人材を多数輩出した。二ノ方良右衛門のように、真剣に生きた人が多数鹿児島に存在していた。器は比べるべくもないが、同じ鹿児島に生まれたのである。気持ちだけでも先人に恥ずかしくないように頑張っていきたい。

「やろうと思った」と「やった」のあいだには、めちやくちや太い川が流れてるんだよ

錦江中(隅) 西田 昌史

私が校長として本校に赴任したところ、校長として何ができるのか、何をしなければならぬのかなどを考え迷っている状態であった。

そんな時に見るでもなくただつけっぱなしにしていたテレビから「やろうと思った」と「やった」のあいだには、めちやくちや太い川が流れてるんだよ」という音声が流れてきた。なにか感じるものがあり、慌ててその言葉をメモしていった。

後日、メモを頼りに誰の言葉だったのかを調べてみると、これは放送作家の鈴木おさむ氏が芸人の品川祐氏との会話の中で言われた言葉だった。鈴木氏はこのとき、品川氏が「やった」ことに対して自分も同じことを「やろうと思うた」けどやれていないことにハッとさせられたそう。私もそのハッとさせられた一人であっ

た。だからこそ、慌ててメモをとったのだろう。

鈴木おさむ氏はこのとてつもない川を渡りきるためには、行動に移すことが大切と説いている。この行動に移すということが難しい。これまでの私を振り返ってみると、「やった」と言えることにあこがれているが、時に面倒臭くなり、時に失敗が恐ろしくなり「やろうと思った」に止まっていた。「やろうと思った」と「やった」のあいだには、めちゃくちゃ太い川が流れているんだよ』という言葉は痛いほど身にしみた。

このような私がこの言葉に出会い、とにかくやってみようと思えるようになり、あれこれ行動に移してみた。行動に移すと「今まで思い悩んでいたことが嘘のように晴れ晴れとした！」なんてことにはならず、職員や保護者・地域との間に大小の波風が立つこともあった。しかし行動することで自分の予想に反する波風を克服する大変さはあるが、やはり「やろうと思った」より「やった」方が学校にも生徒にも良い結果が待っているように感じる。

これからも「やろうと思った」側から「やった」側へと、とてつもない太い川を渡りきるために、信念を持って行動に移していく。



ある日の校長講話



継続は力なり

始良小(始) 池邊 貴康

継続は力なり(掛軸) これは、どんな意味でしょう。そう、「続けることが力になりますよ。」という意味です。もっと言えば、「目標達成のためには、努力が必要。こつこつと欠かさず、休まず続けましょう。そうしたら力になりますよ。」という意味なんです。たった一回や二回の頑張りには、努力とは言えません。二十回、三十回、百回、二百回、いや五百回……と続けることで力になっていくのです。

ここに、一枚の紙があります。厚さが見えますか……。でも、五百枚だとうでしょう。しっかりと見える厚さになりますね。(実物提示) 努力も同じことなのです。一回や二回では見えないけれど、百回、二百回、五百回……と続け

ば必ず結果が見えてくるのです。

みんなよく知っている、あの元大リーガー、イチロー選手はこう言います。「ぼくは天才じゃない。四千本以上ヒットを打ったけど、八千回以上失敗をしているんだ。」「本当の努力って、小さなことでもいいから続けることなんだよ。」と……。イチロー選手は、『努力を続けることができる』という才能を持っていたのです。

トップアスリートと呼ばれる一流選手は、できたからといって、そこですぐ満足はしません。次の目標を持ち、自分の限界、自分の壁を越える努力を重ねています。だから、そんな努力の積み重ねで人間の記録(新記録)って、どんどん塗り替えられているのです。例えば今、高跳びの世界記録は、二メートル四十五センチメートル。幅跳びは、八メートル九十五センチメートルです。(事前に貼っておいたテープで確認)人間の可能性ってすごいと思いませんか。

今、皆さんは持久走大会に向けて、自分の新記録を目指して懸命に練習していますが、漢字だって、計算だって、リコーダーだって、かけ算九九だって、なわとびだって……同じです。こつこつと続けて練習することで本物の力が身に付いていくのです。「継続は力なり」です。

命を大切に生きよう

平成中(北) 大園 誉

夏休み、安全に気を付けて過ごしてくれていることに感謝しています。

夏休みも残り少なくなってきましたが、二学期もしっかりと迎えられるように「命に感謝して生きるこのすばらしさ」について話をします。

靴屋さんと貧しい身なりをした天使の会話です。靴屋さんは、嘆きます。「朝から晩まで働いているのに、家族を養う金にも困っている。私は何も持っていない。」

天使は、答えます。「お金に困っているのなら、お金をあげましょうか。いくら、ほしいですか。」靴屋さんは、ジョークだと思い、笑って言いました。

「百万円くれるかい。」「そうですか。では、百万円差し上げましょう。ただし、条件があります。百万円の代わりに、あなたの足を私にください」「何、冗談じゃない。この足がなければ、立つことも歩くこともできやしない。たった百万円で、足を売れるものか。」

「わかりました。では、一千万円あげます。ただし、条件が二つあります。一千万円の代わりに、あなたの腕を私にください。」「一千万円。この右腕がなければ仕事もできなくなるし、子どもたちの頭もなでてやれなくなる。一千万円くらいで、こ

の腕を売れるか。」

「そうですか。じゃあ、一億円あげましょう。その代わりに、あなたの目をください。」「一億円。この目がなければ、この世界のすばらしい景色も、家族の顔も見ることができなくなる。駄目だ、駄目だ。一億円でこの目が売れるか。」

すると、天使は言いました。「そうですか。あなたはさっき、何も持っていないと言っていました。本当は、お金に代えられない価値あるものをいくつも持っているんですね。しかも、それらは全部もらったものでしょう。」

靴屋さんは何も答えることができません、しばらく目を閉じ、考えこみました。そして、深くうなずくと、心にあたたかな風が吹いたように感じました。天使の姿は、どこにもありませんでした。

(「『おかげさま』で今の自分がある」)

著 志賀内泰弘から(一部省略)

お金に代えがたい命を、皆さんは持っています。皆さん一人一人は、可能性という素晴らしい力を持っています。残り十日間も体調を整えて、二学期に備えてください。

また、夏休みをしっかりと過ごせたのは家族のおかげです。家族への感謝について「学校だより」に書いてあります。時間があつたら、読んでください。

十月八日後期始業式あいさつ

鹿児島玉龍中高一貫教育校 下 田 浩 道

今日の後期始業式は校長室からのリモート配信。緊張で顔が引きつってないか、心配です。

さて、前期終業式で皆さんに語った次の日、九月二十九日のTV番組ロンドンハーツでは、『アイツ語ってたよGP』が放送されました。語っていたのは人気絶頂のお笑い芸人六人。芸人一人(主な二十六の芸能事務所から予想)の中から選ばれた六人は、何を語るのか。

最初の十七才男子の「勉強も部活もスランプ。壁の乗り越え方は？」との質問に、見取り図盛山。「僕もずっと壁にぶつかってる。壁がある方が成長できるんだとワクワクしませんか!」次の十八才女子の「来年受験。先が不安で眠れない」に対して、さらば青春の光森田。「不安と期待は表裏一体。しっかりと準備と努力をしていけば、不安は期待に変わる。ワクワクして眠れない夜を過ごそうよ」また十八才女子の「将来の夢は芸能界。正直不安。心の支えは？」に見取り図盛山。「自分の成功でみんなが喜ぶ。その顔を思い浮かべたら、めちゃめちゃ頑張れます。どの道も不安はつきもの。夢の数だけワクワクできる、と思ったら最高でしょう!」盛山はワクワク2回目。ロンブーとザ

キヤマは「ワクワク族」で森田、盛山を括りません。続いて十七才女子が「親友がいない。親友を作るには？」と質問。バイキング小峠、「そんなもん作ろうとしてできるもんじゃない。いつ出会うんだらうって、ワクワクしながら生きていったらいい！」と回答。もちろん、小峠もワクワク族の一味に加えられます。カンニング竹山は「親友を欲しがるのは、孤独を嫌うからよ。でも、成長するには、孤独が必要なんだよ」と語り、皆から「刺さる！」との声。

共通するのは楽観的ポジティブさ！壁があっても、不安であっても、孤独であっても、ワクワクする。笑い飛ばして前進する。『哲学と宗教 全史』がベストセラーの立命館アジア太平洋大学 出口治明学長は、「人間の歴史は 悲観論全敗、楽観論全勝」と話されます。

後期は、自分の学業や部活の今年度の課題解決に向け努力し、来年度に想いを馳せる学期です。ガンガン前のめりに攻めに攻め、「ワクワクの令和二年度後期」にしてほしい、と希望します。ザキヤマから「ワクワク以外はただのイントロ」と突っ込まれそう・・・。



話のひろば

学校における ウイズコロナ

荒田小(市)

下 江 嘉 誉

令和二年は新型コロナウイルス感染症によってこれまで経験したことのない一年となった。

三月、全国での一斉臨時休業に始まり、四月の再度の臨時休業により、学校生活全体が大きく変わる事となった。

年度末の卒業式・終了式、新年度の入学式・始業式は実施できるのか。これまで当たり前のように実施してきた他の学校行事、教科学習等はどうすればよいのか。また、この感染症の予防対策はどうするかということなど、連日新しい課題と向き合わなければならなくなった。すべてが初めてのことで、判断に戸惑うことの連続であったが、教育委員会の指導の下、近隣の学校と連携し、様々な対応策を実施してきた。そして、新型コロナウイルス感染症への対応策等も少しずつ明らかになり、中止や延期として

きた活動等が徐々に実施できるようになってきた。ウイズコロナの「新しい生活様式」に基づく教育活動の実施方法が見えてきている。

現任校においては、終業式、始業式等の学校行事は、上学年・下学年に分けるなど可能ならば集団を分けて実施することとしている。

また、六年生の修学旅行は、五月から十月に、目的地を県外(熊本方面)から県内(鹿屋・霧島方面)に変更して実施した。目的地変更により残念がっていた児童も、本県の素晴らしさの発見につながり、充実したものとなった。五年生の宿泊学習は、宿泊を伴わない二日連続の体験学習として、十一月に実施することとした。

授業参観については、我が子や学校の様子を参観したいという保護者の要望に応えるため、期日と時間を分けて実施している。少人数のため熱心に参観されるなど好評である。

この感染症の終息が見通せない中、「ウイズコロナ」の状況は、今後もしばらくは続いているであろう。学校においては、マスク着用や手洗い、換気など感染防止対策を徹底するとともに、どうすれば充実した教育活動を展開できるかを考えながら、これまでと同様に質の高い教育を提供していくことが大事である。

地域と共に

境小(隅)

八木澤 一郎

本校は、総児童数七人、全三学級からなる極小規模の複式学級校である。

小学校のすぐ目の前には鹿児島湾が広がる。校区は、鹿児島県ブランド魚「かごしまのさかな」に選ばれた、養殖ぶり「ぶり大将」の産地の一つとして有名である。生け簀に向かう漁船の出す発動機の音が朝早くから集落に響く自然豊かな土地である。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防止するため、多くの行事を中止あるいは規模を縮小して実施している。

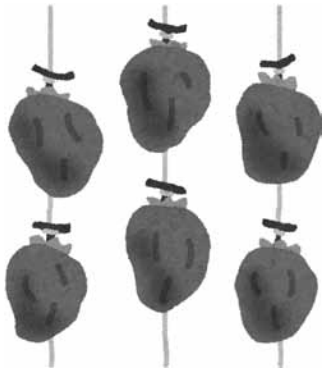
その中で、地域の基幹産業である漁業との関わりを学ぶ「魚釣り体験」が実施できたのは、地域の方々に漁船を三隻も出していたくという御協力を得ることができたからである。多くのアジ等が釣れたことは、児童たちにとって貴重な体験となった。

また、地域にとってお祭りの色合いが濃い「小学校・校区合同運動会」は午前中のみで開催とした。昨年度は十一種目も行われた地域種目は、地域との協議の結果、今年度は身体的距離を保ちながらの「垂水音頭」一種目のみの実施となった。そのような状況においても約百人の地域の方々が来場し、児童たちの懸命な競技や演技に

大きな拍手をいただいた。大変ありがたいことと感謝している。

極小規模、複式学級校の「弱み」には、児童たちの固定化した人間関係や、大きな集団に属する児童に比べ社会的な経験や集団による話し合い活動の経験の少なさがあると言われている。本校においてもその「弱み」を痛感している。その「弱み」を補うため、隣接校の協力を得ながら遠隔による合同授業を見据えた交流学習を開始した。まだ手探りではあるが、児童たちの笑顔に助けられながら、経験の積み重ねを行っている。

学校と家庭・地域が心をつつに合わせ、多様な体験を通してこの素晴らしいふるさとに誇りを持ち続けることができる児童たちを育てていきたいと考えている。



子どもの一生を

救った教師

安房小(熊)

永田 昇

「子どもの一生を救った教師」と言っても過言ではないと思う。それは、前任校で出会った六年担任の女性教師である。このクラスには一年時から不登校の子もいた。

小学一年(要出席一九四日 欠席七〇日)
二年(要出席二〇二日 不登校一九四日)
三年(要出席一九六日 不登校一九五日)
四年(要出席一九八日 不登校一九七日)
五年(要出席二〇〇日 不登校二〇〇日)
小学六年(要出席一九九日 不登校一八五日 出席一四日)

二学期末に本人と両親に会い、担任が中心となってじっくりと話し合いをもつことができた。それが信頼回復につながり、日曜日に学校で担任と話をしたり学習をしたりできるようになった。段階的に人との関わりを経験させ、卒業式まで残り二月となった一月二十五日(金)には午後から教室に入り学級の友達と過ごすことができるようになった。さらに、二月八日(金)は、標準服を着て登校し、友達とオルゴールの製作をすることもできた。保護者からは「中学校入学説明会の資料をください。」という前向きな言葉も聞くことができた。

「小学校卒業、そして中学校への進学という

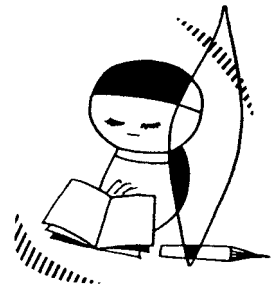
大切な節目の時にこのままではいけない」という担任の熱い思いと努力、学校全体での支援、継続した粘り強い保護者との連携等が実を結び、三学期後半から徐々に登校できるようになってきた。特に担任は保護者や本人に気を配り学校での面会は平日を避けて土日に面会したり、計画表を作ってこれまでのやり取りを記録したり、「A子さんノート」を作り一日一日の目標を設定したりした。また、保護者の「親以外の人からまずは慣れさせたい。」という要望に配慮し、学校内の特定の場所の設置や特定の友達を配置するなど、なみなみならぬ努力を投じた。

現在、中学校では生徒会活動や部活動・英検へのチャレンジ、さらに地域の行事等へも積極的に参加しているということである。もちろん不登校理由の欠席はない。

まさに子どもの一生を救った教師である。



読書案内



■濱里 忠宣 著

若き旅人たちへ

馬根小(大) 茶屋 大作

この本は、わたしが教育への思いを新たにしたい時、折に触れて手に取る一冊である。著者の濱里忠宣先生は、みなさんもご存じのとおり、教育界の大先輩である。残念ながら七年前に八十二歳で亡くなられてしまったが、今でも多くの人から敬愛の念を集めている。わたしは、生前一度だけ親しく話をさせていただいたことがある。以前県立図書館に奉職する機会があり、その時担当した講座に講師として来ていただいた。不勉強な自分は、県教育長もされた偉い先生だということぐらいしか知っておらず「これはいかん」と大いに慌ててしまった。とりあえ

ず、先生のことを少しでも知らねばと、図書館にあった著書を片っ端から読んだ。そのうちの一冊が「若き旅人たちへ」だった。この本には、いろいろな機会に新聞や雑誌に発表された随筆や、講演録、高等学校長時代の講話・式辞等が再構成されて収められている。

最初は、先生にお目にかかるまでに、少しでも先生のことを知っておかねばという職責感で読んでいたが、読んでいるうちに、そこに書かれている先生の教育に対する思いや情熱といったものに傾倒していく自分がいた。実際にお目にかかった濱里先生は、温かいお人柄で優しく話される方だったが、話される言葉の中からは温かさだけではなく、教育に対する憧憬やロマン、教育に向き合う者に必要な厳しさや哲学といったものが感じられた。本書の中に収められている講演録の中に次のような一節がある。「すなわち、われわれ自身が、真に学ばんとする気概に満ちていない時、わが教え子たちに、どれほど学ばんとする気概が湧いてくるでしょうか。それは、『憧れ』の喪失です。教育に携わる者が、どれだけの覚悟を持って子どもたちと向き合えないといけなのかを教えてくれる言葉である。温かさ、情熱、厳しさ、哲学、いつの時代でも色あせない教育の真髄を思い起こさせてくれる一冊である。ちなみに、『樟南序章』『遠い宴』といった著書もあるので、機会があれば一読してみられてはどうだろうか。

講談社 一九〇〇円

■五木 寛之 著

大河の一滴

甲東中(市) 立石 芳文

小学生のころ「お土産は何がいい？」という祖父の問いに、兄やいとこたちは当時流行っていた「ミニカー」を、私は、「戦争の本」が欲しいと答えた。後日、ミニカーで遊ぶいとこたちを羨ましく思ったことをついこの間のことのように覚えていた。祖父が選んでくれた本は、「燃える真珠湾」というタイトルで、史実に沿って書かれたものだった。私は、本を読みながら寝る癖があったので、中学を卒業するころまでこの本には付き合ってもらった。

そんな中学時代に、「さらばモスクワ愚連隊」という単行本で五木寛之という作家を知った。子どもながらも、絶望的でありながら、同時に希望を感じさせるような独特な世界観に感銘を覚え、その後、同作家の本を好んで読むことが多くなった。最近では、大きな書店の読書スペースで小刻みに新刊を読ませてもらっている。

さて、今回紹介する「大河の一滴」もその中の一冊であるが、これは小説ではなく作家の人生観を本音で書き綴ったものである。特に、冒頭の「人はみな大河の一滴」の一文は、本音で語ろうとする同作家の覚悟のようなものが伝

わってくる。

「まず、これまでの人生観をひっくり返し、『人が生きることは苦しみの連続なのだ』と覚悟するところから出直す必要があるのではないか。」

「泣きながら生まれきた」人間が、『笑いながら死んでいく』ことは、はたしてできないものだろうか。」

「私たちはふたたび、人間はちっぽけな存在である。と考え直してみたい。だが、それがどれほど小さくとも、草の葉の上の一滴の露にも、天地の生命は宿る。生命という言い方が大げさなら、宇宙の呼吸と言いかえてもいい。」

本書は、何度も読み返すことで、放たれた言葉の数々が、日常の不安や迷いを和らげてくれる身近に置きたい一冊である。

幻冬舎 四七六円



■瀬尾まいこ 著

見えない誰かと

垂水中央中(隅) 長崎 伸一

「忙中閑あり」。様々な決断を迫られるコロナ禍の中で、ふと手にして読み返したくなるエッセイ集。現実逃避との誹りもまぬがれないが一旦思考を中断整理し、高ぶった感情を鎮めてくれる一冊であり、何よりやる気が漲ってくるからうれしい。小難しい教育書が苦手なだけかもしれないが。

中学校の国語教師時代を中心に、関わった「誰か」とのエピソードが、飾らない文体で三十数編綴られている。勤務先の校長、教頭、同僚、アルバイト先のおばさん、家族・親族、友人、ペットの猫、偶然知り合った高校生、そして教え子たち。彼女の自然体で接する態度や何より生徒が好きだという滲み出る感情が、全編を通してほのぼのとした雰囲気を作り上げている。時には冷静に内省を繰り返しながら、確かな観察力で生き生きとした人間関係を描写しており、どのエピソードも前向きな言葉で結ばれている

学級を見比べてしまうと、その経営手腕について物足りなさを感じてしまう担任がいるが、こちらの気付かぬところで、しっかり生徒と教師はつながっているものである。「はじまりやきつ

かけはめちやくちやであつても、いくつかの時間を一緒に過ごす、何らかの気持ちが生えるんだなあって思う。毎日文句を言ってるうちに、一緒に登校しているうちに、気持ちが形を変えていったんだって思う。いつもいい方向に動くとは限らないけど、接した分、やっぱり何かは変わっていく。」やんちゃな生徒との交流を綴った「ストーリーカー」の結びのこの一節を悩める若手教師に贈りたい。

近年、本屋大賞を受賞し、中学一年の国語教科書にも書下ろしの作品が掲載されている筆者の本作の読後感を一言で表すなら「ほっこり」である。

祥伝社 五五〇円



■島村 華子 著

自分でできる子に育つ

皆与志養護(市) 土井 靖 之

教職員の採用試験の面接で、ほめるときと叱るときとの留意点について質問があったと、受験した先生から聞いたことがある。自分だったらどう答えるだろうかと思っていたところこの本に出会い、答えへのヒントをもらうことができた。主に幼児からの接し方が書かれているが、昨今の家庭教育でできていないところもあるのだ、ぜひ紹介したいと思う。できれば、家庭教育(育学級等で保護者にも紹介して)ただければ幸いである。

先生方は、子供たちに対して無意識にこんなほめ方はしていないだろうか。「すごい!」や「えらいね!」などのポジティブで子供の自信につながるように聞こえるこれらの言葉は、使い方によっては子供の成長にとって必ずしも有効でないこともある。本書では三種類の「ほめ方」があると書かれている。

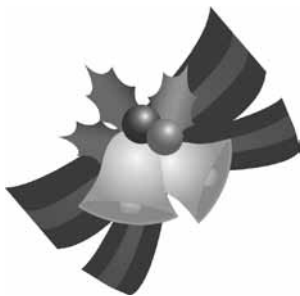
「おどなりなほめ」「人中心なほめ」「プロセスほめ」である。著者は、前の二つのほめ方については、「ほめられ依存症になる」「慣れすぎて興味を失う」などの理由で、三つめのほめ方を推奨している。「成果よりもプロセス(努力・

姿勢・やり方)をほめる」ことである。本来子供たちが求めているのは評価ではなく、何かを達成したときや新しいことを発見したとき、うれしいことがあったときに、大好きな親や先生とそれを共有できる環境であると書かれている。

「叱る」ことについては、罰を与える叱り方、特に体罰は絶対だめだが、その他、口頭による罰(怒鳴る等)、物理的な罰(物を取り上げる等)、行動による罰(無視等)も、より攻撃的で反抗的な態度を生み出したり、その方法が子供の成長の中で正当化されたりすることがあるので、決して望ましい叱り方ではないということである。結果だけではなく努力やプロセスに目を向けたり、好ましくない行動の理由を子供に説明したりすることなどが、上手な叱り方である。

この他にも、聞く習慣など、興味ある内容が掲載されている。紹介できなかつたことは、ぜひ一読することで、保護者との話題の一つとなることを期待する。

デイスカバー・トゥエンティワン
一五〇〇円+税



二〇〇四年アテネオリンピック。体操男子団体が二十八年ぶりに金メダルを獲得した。テレビの中継では、当時のアナウンサーが、富田洋之選手の鉄棒の演技とゆず作曲の「栄光の架け橋」の題名を重ねて実況した。「伸身の新月面が描く放物線は、栄光への架け橋だ！」のセリフが響き、日本全国に感動の渦を巻き起こした。スポーツの世界の感動は、計り知れないものがある。自分では、到底成し得ることができないこの世界が、私は好きである。

自分自身、故郷喜界島で中学時代からバレーボールをやってきた。その当時の指導は、スパルタ方式で、練習は、外コートで行っていた。体育館には、一コートしかなく女子と輪番で使っていたからである。外の練習では、乾いたコートに水をまき、地獄の千本レシーブをさせられ、胸に擦り傷を残す毎日だった。夜はくたくたになり、眠たい目を擦りながら、テストや受験の勉強をやっていたものである。時には、監督の先生を憎らしく思ったり、先生が来る前には適当に練習をしたりしていた。しかし、そんな時に限って先生に見抜かれたのか、さらに厳しい練習が待っていた。

そんな努力のおかげか、地区大会で三位入賞、県大会でも三位入賞の快挙を成し遂げた。顧問の先生の「これまでよくついて来てくれた。おめでとう。」の最後の祝福の言葉と笑顔を含め、今でも忘れない。その恩師も今は他界し、帰らぬ人



となった。

「スポーツには、人を変える力がある。」と東京二〇二〇オリンピック・パラリンピック招致委員会理事長の竹田恆和氏は言っている。また、国際連合広報センター (United Nations Information Center) は、「スポーツは、①他人に対する尊敬の意と、人々の間の対話を促進します。②子どもと若者が生きるために必要な術や能力をもたらします。③障害の有無にかかわらず、全ての人々の社会への参画を促します。④男女の平等を促進し、女性のエンパワーメントに貢献します。⑤身体の健康のみならず、心

「スポーツの力」

秋名小(大) 平田郁夫

の健康を向上させます。」と示している。私は子育ての一環として、長男には野球、長女にはバレーボールを自己選択させ、取り組ませた。集団スポーツから、人との関わり方や集団の中での自分の気持ちのもつていき方など、多くのことを学んでほしかったからである。一人は、今でもそのスポーツを続けている。集団スポーツで学んだことの効果か、人様に迷惑をかけることもなく、人の気持ちを考えて行動する、心優しい大人に成長してくれたという自負がある。これもスポーツが育ててくれた力なのかと感じている。

今学校で、これまでの自分の経験を基に、子どもたちに、次の言葉をよく話している。「練習は、嘘をつかない。」耐えまぬ努力は、きつと実を結ぶし、たとえ叶わなくても後悔はないということだ。努力することの大切さを理解してほしい、そんな思いで語っている。

現在私自身は、朝夕のウォーキングと、月一回の趣味のゴルフをスポーツライフとして楽しんでいる。生涯スポーツとして、自分の健康づくりに役に立つのではないかと考え、行っている。退職まであと一年となり、体力の衰退も感じるが、唯一の楽しみである。ウォーキングは、



心無しにしたり、自然の音を楽しんだりする唯一の機会となっている。また、ゴルフは、メンタルなスポーツと言われるように、自分の気持ちの持ち方で、スコアメイクにつながるスポーツである。でもないのだが(…;)。

コロナウイルスの猛威でスタートした令和二年度。オリンピックも一年後に延期、春夏の甲子園も中止、プロスポーツ界も時期を遅らせのスタートなどスポーツへの影響は計り知れない。生きる力を与えてくれるスポーツの力が発揮される情勢に、早くなってほしいものである。スポーツから生み出される感動や力から、なりたい自分を夢見て、夢実現を志す子どもたちが多く出てくれることを願っている。



甌はひとつ

「結」を大切にする島 自然と歴史の宝庫の島

中津小(北) 辻

孝 義

一 甌列島の概要(由来と位置、地形、地質)
甌列島は、東シナ海にあり、全長三十八km幅十kmである。その隔絶性から、歴史と民俗の宝庫とされてきた。甌の地名の由来は、上甌島の海岸にある甌(そこに穴の開いた取手付きの食物を蒸すための土器)形の岩を御神体にして甌大明神として祭ったことからであるという。平安時代の中期の文献である『和名抄』には「古之木之万(こしきしま)」と表記してある。

地形は、かつて山脈の頂上が海上に残ったとされ、リアス式海岸と起伏に富んだ地形である。北東から南西にかけて上甌島、中甌島、下甌島の有人三島が並んでいる。甌列島は全体に山肌が海にせまり、沖積平野の発達が極めて少ない。上甌島と中甌島は比較的穏やかな丘陵が広がるが、下甌島は四百から五百mの山地が卓越し、特に西海岸は切り立った断崖が点在する。上甌島は、下甌島と比べて縦の変化に乏しい一方、里集落の陸繋砂州(トンポロ)、三つの池と東シナ海とが砂州で区切られた長目の浜、奥地まで海が入り込んだリアス式海岸の浦内湾など、横の地形変化が豊かである。

地質学的には、上甌島は、比較的新しく五千年〜六千年前の地層である。それに比べ

て、下甌島の上の方(鹿島集落)には、約八千年前の白亜紀の地層があるため、日本国内では初めてのケラトプスの化石が発見されアジア全域でも貴重な発見とされている。鹿島集落の蘭牟田にある地層からは恐竜やワニなど爬虫類の化石も発見されている。

二 甌列島の自然と水産物

甌列島は、昭和五十六年に甌県立自然公園に指定され、海岸にはウミガメが上陸する。また周辺海域は、カツオクジラなどの鯨類の回遊海域にもなっている。植物では、木生シダであるヘゴの自生北限の一つで国の天然記念物に指定されている。

甌列島といえは鹿の子百合の自生地として有名である。夏場に薄紅色の花を咲かせるが、本来、湿気に弱いはずの鹿の子百合がなぜ高温多湿の甌列島に自生するかは解明されていない。

上甌島には、長目の浜(甌四湖)と呼ばれる、大小三つの池が砂州よって海と隔てられた景勝地がある。北からなまこ池(離島にある湖沼日本第三位)、貝池、鎌崎池であり、似たような地形で隣接しながらも、それぞれ塩分濃度や成層状態が異なっている。長目の浜から東側に離れている須口池があるが、この四つの池で甌四湖と呼ばれる。平成二十七年三月には、長目の浜と三湖沼、砂州上の植物群落が、「甌島長目の浜及び潟湖群の植物群落」の名称で、国の天然記念物に指定された。

甌列島周辺海域は、アジ、サバ、ブリなどの回遊魚に加え、キビナゴ(島ではジャコと言ふ)、バショウカジキ、アワビなどの水産資源が豊富で県内有数の漁場となっている。なかでもキビナゴは一年中漁獲されるが、五月から七月までの夏期は子持ちジャコがとれ最盛期である。最



【なまこ池と里トンポロを望む】

近では、浦内湾でクロマグロの養殖漁業も行われている。

三 旧上甌村の学校

中津小学校は、旧上甌村中甌にある小学校である。旧上甌村は、甌列島の北中部に位置しており、甌列島の上甌島の一部と中甌島の全域から構成されている。大字は中甌、江石、中野、小島、瀬上、桑之浦、平良がある。平良は、中甌島にあり、平成六年に開通した甌大明神橋(上甌島-平良島)と鹿の子大橋(平良島-中甌島)二本の橋が架かっている。現在は中甌島と下甌島の間も甌大橋(千五百三十二m)が令和二年八月二十九日に開通して甌列島は一つに繋がった。

旧上甌村には、かつて五小学校があったが、昭和四十三年に桑之浦の宇佐小学校が、昭和四十四年に江石の江石小学校が、平成二十年に瀬上の浦内小学校が、平成二十三年に平良の平良小学校が閉校し、中甌の中津小学校に統合された。中学校は二校あったが、平良の平良中学校が平成十三年に上甌中学校に編入された。しかし、生徒数減少のため令和二年から休校になり、現在旧里村の里中学校に通学している。

中津小学校は、明治十年に「中甌小学校」として創設され、今年度で創立百四十四年目を迎える。児童数は、昭和三十六年の四百六名をピークに年々減少し、現在二十三名、完全複式で特別支援学級があるため四十三級である。今年度から里中学校区になり、一中二校で「ふるさとを胸に社会の中で自立していく児童・生徒の育成」をテーマに、キャリア教育の推進を軸に、小中一貫教育に取り組んでいる。本校は薩摩川内はんやジュニア大会で市長賞(最高位)を六回も受賞する強豪校でもある。



【甌大明神橋と夕日】

*** ころの詩 ***

竹

ますますなるもの地面に生え、
するとき青きもの地面に生え、
凍れる冬をつらぬきて、
そのみどり葉光る朝の空路に、
なみだたれ、
なみだをたれ、
いまはや懺悔をはれる肩の上より、
けぶれる竹の根はひろがり、
するとき青きもの地面に生え。

萩原朔太郎

一般財団法人校長会館だより

教育長異動

○再任 令和二年十二月十八日付

三島村 室之園 晃徳 氏

○再任 令和三年一月八日付

南九州市 有馬 勉 氏

八月号でお知らせしましたように、本年度の教育講演会はコロナウイルス感染拡大防止のため、やむをえず中止となりました。

来年度は通常どおり十二月に実施できますようお願いしております。

季節の言葉 「夜神楽」

夜かぐらやおし拭いたる笛の霜 蝶夢

出雲大社では神在祭の期間中、夜神楽特別祈禱が行われるが、ここでは九州の日向神楽や高千穂神楽などを指していることが多い。いわゆる里神楽の一種である。五穀豊穡を祈って「祝者」と呼ばれる人が、夕方から翌朝まで演じる。

編集

後記



某情報誌に、予測困難な時代に必要な「変化に適應する能力」と「しなやかに生きる能力」について解説している記事があり、自己評価用チェックシートがついていました。それを使って、このコロナ禍に、様々な対応して頑張ったつもり自分自身を自己評価してみました。

記事によれば、「変化に適應する能力」とは、変化に対して必要なことを学び、自分の考え方や行動を変容させて、生き生きと活動する能力のことで、その行動特性として、「好奇心」「持続性」など五つ挙げられています。「しなやかに生きる能力」とは、ストレスに適切に対処しながら自分自身を柔軟に変化させる能力のことで、その行動特性として「感情コントロール」「解決志向」など、これも五つ挙げられています。行動特性ごとの設問に答えて出た私の「変化に適應する能力」はB(S)Dの五段階評価、「しなやかに生きる能力」もB・・・可もなく不可もなくという結果でした。自分を過大評価していたようです。

さて、「こんなはずではなかった。」の思いを多くの人が味わった令和二年が暮れていることとしています。一方で、「こんな時代であっても」という思いと、「こんな時代からこそ」という思いが交錯し合った一年でもありました。皆様からいただいた玉稿に、そうした思いを重ねて拝読したこの時代に学校教育に携わる者としての意を強くうございました。(喜入小学校 内村英人)